

Title	「身体性」と「癒し」に関する一考察～「聖娼」のイメージをもとに～
Author(s)	廣澤, 愛子
Citation	大阪大学教育学年報. 2001, 6, p. 337-346
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11400
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

〈研究ノート〉

「身体性」と「癒し」に関する一考察

～「聖娼」のイメージをもとに～

廣 澤 愛 子

【要旨】

近年、心理療法に訪れる人々の中に、心身症や摂食障害といった体の症状を伴う女性が増えている。この背景について考えるうちに、心身二元論的に捉えることの限界を感じ、心とも体ともつかぬ、そのあいだにあるような、あるいはその両者を包み込むような「身体」があるのではないかと考え至るようになった。

そこで本論においては、「身体性」について考えるための一つの素材として「聖娼」というイメージを用い、これを中心として連想されたいくつかのトピックについて考察した。聖娼とは神殿巫女とも呼ばれ、神殿を訪れる異邦人と聖なる性の結びつきをした女性たちである。論文構成は、1. 聖娼というモチーフにおいて、聖娼のイメージやそこから考えられる二つの視点について触れ、2. 女神イナンナでは、聖娼の儀式を見守る女神イナンナの属性について考察した。そして、3. 主体的受動性と意識性及び、4. 自然のリズムと聖娼は、聖娼のイメージから連想された二つの視点であり、ここでは女性が主体性を獲得していくことの必要性和困難さや、身体性の問題と女性性の荷う癒しの力の親近性、あるいは聖娼が体現している、生と死の循環や性のもつ「魔」の様相について論じた。これらは今後、身体性についてより考察を深めるための重要なキーワードになるように思われた。

<はじめに>

近年、心理療法に訪れる人々の中に、心身症や摂食障害といった身体にまつわる病いを抱えたひとが増えているように思われる。ここでいう身体とは、こころと対峙される、いわゆる体という意味ではなく、こころとも体ともつかぬ、そのあいだにあるような、あるいはその両者を包み込むような意味で用いている。はっきりと言語化することの難しい領域ではあるが、それはWinnicottの言う中間領域やJung派の人々がsubtle body (捉えがたい体)と呼んでいるものに近く、体という物質的なものところという心的なものとの両者が関与したところという意味である。

筆者は上述したようないわゆる体の症状を伴う人々と接していくなかで、ここでいうところの「身体性」について考え始めるようになった。ちなみに心身症や摂食障害とは女性に多い疾患であり、そのことは身体性を考える際に考慮すべき大切な点であると思われるが、今日、彼女たちはなぜ「身体を病んでいる」のであろうか。そして心身症や摂食障害といった身体の病を通して何を訴えているのだろうか。さらに、その病をくぐって治癒されていく過程において、どのような変容がおこっているのだろうか。

このような問いに答えることが筆者の目的であるが、現段階においてこの問いに直接的に答えることは大変難しい。そこで本論文においては、「身体性」に深く関与するイメージを持つ「聖娼」というモチーフを使い、このモチーフから考えられることをまずはまとめることとした。ちなみに「聖娼」とは、神殿に居て、そこを訪れる不特定多数の男性 (Stranger) に身体を許す女性たちであり、古代においては実際に存在していた。「聖娼」については後に詳述するが、彼女たちは「神殿巫女」や「神殿売春」とも呼ばれ、ここでの性の結びつきは聖なるものであり宗教的な行為として認識されるもので、今日的な価値観のもとで誤った解釈はしないでいきたい。

ひとくちに「聖娼」のモチーフから考えられることといってもいろいろとあるが、ひとつは聖娼の儀式 (イニシエーション) から考えられることをまとめ、またもう一つは、聖娼という女性像がもつイメージから考察できることをまとめた。前者は本論における「3. 主体的受動性と意識性」にあたり、後者は

「4. 自然のリズムと聖娼」にあたる。また、これらについて述べる前に「1. 聖娼というモチーフ」において、聖娼についての説明やそこからイメージされることを簡単にまとめ、「2. 女神イナンナ」においては、聖娼のイメージの原型となっており聖娼の儀式を見守る女神であるイナンナの属性についてまとめた。

聖娼というところと体の二分極を越えた存在について考えることは、心身症や摂食障害といった身体の問題を抱えている人々の病いをもつ意味やその治癒過程について知るための大前提であり、またそこから有益な示唆が得られるとも思う。しかしまたここでは聖娼という一つの視座から連想されることをまとめており、このことがどう身体性を考察することに結びつくのか、あるいは心身症や摂食障害の人々との心理療法を論じていくことにどう繋がっていくのかがあまり明確になっていない。したがって、それについては今後の課題とし、本論はその前段階としての臨床心理学的な基礎的研究として位置付け、博士論文の礎の一つとしたいと思う。

1. 聖娼というモチーフ

聖娼 (The Sacred Prostitute) とは聞きなれない言葉かもしれないが、歴史的に確かに存在した女神に捧げられた人間の女性であり、また現代女性のこころの中に息づく元型的な女性イメージでもある。バビロニアの習慣では、その国のすべての女性が一生に一度は、愛の女神の神殿にこもって見知らぬ男性 (Stranger) と交わらなければならなかったといい、聖娼の儀式が女性のイニシエーションとして存在していたことを示している。聖娼の儀式を簡略化して述べると次のようになる。

見知らぬ男性 (Stranger) は神殿の社内に座っている女性の膝元にコインを投げ、そして「ミュリッタ様の御名にかけて、お相手願いたい」とだけ言えばよい。女性はそれをつき返すことは出来ない掟になっている。二人は女神のご加護のもとで、匿名性の出会いをして個人的な関係を越えた聖なる結びつきを経験する。コインは女性に対して払われたものでは決してなく、彼女の献身の儀式に参加させてもらえるよう許しを得るために、女神に支払われたのである。女性は男性を受け入れた後、女神に対する奉仕を果たしたことになる家に帰ることができ、来るべき結婚の準備を整えるのである。

また、古代のわが国においても同様に、女性は異界からやってくる異邦人 (Stranger) を歓待し、この「まれびと神」と一夜をともにすることを経験して初めて人間の妻となることができたと言う (折口、1929)。

河合 (2000) はこれを「娘が母になるためのイニシエーション」であると述べているが、このように言われる大きな理由の一つとしては、見知らぬ男性 (Stranger) を決して拒むことなく受け入れるという「絶対的な受容性」を経験することがあげられると思われる。そしてこの受容性が体を伴ってなされるものであることが女性のイニシエーションの大きな特色であり、これがただ無知に盲目になされるものではなく、より意識的に自ら自覚してなされるような「主体的な受動性」として機能し始めたとき、これは一つの「癒し」へとつながっていく。イニシエートされるもののこころが「癒し」を経験する前兆であり、また心理療法の場でセラピストが「主体的な受動性」を持ちつづけていることが両者の受容にとって必要であるという意味でもある。「主体的な受動性」については後に詳述したいが、女性のイニシエーションと絡めて聖娼のモチーフから理解される一つの視点として取り上げておきたい。

また、宮野 (2000) は聖娼の儀式について「象徴的に解釈すれば、見知らぬ他者として外界に投影された、女性の聖なるエネルギーである男性性に覚醒し、それを Aphrodite の守りのもとに自らのうちに受け入れることである」と表現している。見知らぬ男性 (Stranger) の侵入を女性が少女から大人の女性になるためのイニシエーションとして捉えているが、「女性の聖なるエネルギーである男性性に覚醒する」という表現は、非常に示唆深い。ここでいう男性性には様々な意味合いが含まれていると考えられるが、ひとつには女性にとっての意識性を表しているように感じられる。意識すること、知っていること、見ていること、それらは成熟した女性性を獲得していく過程でたいへん重要である。少女にとって大人の女性になるためのイニシエーションは、ギリシャ神話におけるペルセポネーのハーデースによる強奪に見られるよ

うに、死ぬほどの恐怖であるのに、ただじっと受難するしかないという初めての経験である。また女性一般にとっても、聖娼という儀式が内包する、己の意思に関わらず不特定多数の男性と身体をあわせなければならぬという掟は、まさに身をもって己をさらし、来るものを受け尽くすという、同じく受難の過程をたどると考えられる。Perera(1981)は、このことを「不特定の男性の非個人的なファロスという十字架に磔になるというイニシエーションの中で、死ぬ思いを味わったことでしょう」と説明している。しかし、このような過程を経験してはじめて「意識性」が芽生えるように思われ、「受動性」も主体性を獲得するよう感じられる。徹底的に受け入れるという「受容性」がもつ癒しの力が必要であり、また必然であるとともに、それにとまなう「痛み」を感じる事が主体性を喚起し、女性のイニシエーションにとっても女性性の成熟にとっても必要不可欠であると思われる。そしてさらに、この「痛み」を感じる事が身体性について考える際のひとつのキーワードになると感じられるのである。

一方、Qualls-Corbett (1988) は聖娼について詳細に述べているが、聖婚の儀式における聖娼の役割については以下のように記している。

「彼女は自分自身のアイデンティティの感覚を与えてもらうために男を必要としたのではない。むしろ、この行為は彼女自身が女性であることそのものに根ざした。…(略)…彼女の存在理由は、愛の行為の実践によって女神を崇めることであり、…(略)…根本的な再生の力に触れ、そしてそれによって、女神の化身として生命と愛の連続性を保証した。」(Qualls-Corbett, 1988)。

つまり、愛の女神の神聖な自然の法則のもとで、彼女たちは奔放に官能的に自らのセクシュアリティを体現し、かつ誰のためでもない自分自身のために愛することを表現するのであり、見知らぬ男性(Stranger)であるがゆえにそれが可能であると考えられる。Harding (1971) はこのようなあり方を、より主体的な存在様式として評価しており「自分自身のための個人 (One-In-Herself)」と表現する。ここでも見知らぬ男性 (Stranger) であるということが重要視されているが、それは個人を愛し、それゆえ個人的愛に縛られたりすることなく、自然に、おもむくがままに自らのPassionを体現するためには匿名性が必要だからである。ここでの聖娼のイメージは、情熱的・情動的で、愛情深く奔放で、本能的であり、また躍動し、たくさんの命が息吹き、どくどくと波打つ生命の力強さを感じさせる。つまり「生きていること」を表し、季節で言えば花が咲き乱れる春のイメージが最も近い。Ulanovは女性性の二つの機能について言及しているが、ひとつは母性的で静的で、安全や保護をもたらし、安定して変わることのない側面であり、もう一つはダイナミックで変容を促すような側面であると言う。Qualls-Corbett (1988) は後者を聖娼に結び付けており「愛の女神と結び付けられ、聖娼と同一視されるのは、まさに女性のなかのこの動的で、変化し、変容を促す側面なのである」と述べている。つまり、先の「主体的受動性」においてはある種の忍耐強さ、じっと動かず待つこと、などに言及したが、同じ聖娼のイメージから、変化をもたらす、創造していくという動的な側面が喚起される。これもまた心理療法においては重要なことであり、さらに、動的なリズムとは身体性に関わるひとつの大事な要素なので、これを二つ目の視点として取り上げてみたいと思う。

ここまで、聖娼というモチーフから連想される二つの視点について述べてきたが、次にそれらについてより詳しく考えていきたいと思う。しかし、それらについて触れる前に、聖娼の儀式を見守る女神として崇められている、シュメール神話における女神「イナンナ」についてまとめておきたい。それは、イナンナの特長やイナンナの聖婚について概観しておくことが、先の二つの視点について考える際の前提になると思われるからである。

2. 女神イナンナ

シュメール神話に登場している大女神イナンナは、神々の娼婦として位置付けられ聖娼の儀式を見守る女神として崇められているだけではなく、多様なイメージを荷った女神である。Perera(1981)はイナンナの属性について次のように述べている。

「私たちの用いる語感でいうところの母性的な存在ではありません。女神アルテミスのように、彼女は『母性性と処女性、生命の喜びと殺人の欲望、肥沃さと獣性ととの境界領域の半ば』にいます。イナンナは典型的な、ポジティブな少女（プエラ）、つまり永遠に若く、動的で、獐猛で、感覚的な、処女の娼婦なのです。そして、落ち着いた、家庭的な妻では決してなく、父権制の下の母でもありません。独立を保ち、恋人として、若い花嫁として、また未亡人としての魅力をも保っているのです。…（略）…豊穰、秩序、戦争、愛、天界、癒し、情動、そして歌の女神としての力を持っているにもかかわらず、さらに、数々の神殿に令嬢や妃の称号を持っていますが、イナンナは放浪者なのです」（Perera,1981）。

大変多彩な印象を与える女神であるが、イナンナは若い羊飼いであるドゥムジと聖婚（ヒエロス・ガモス）を果たす。この聖婚における女神イナンナと同一化するなかで女性的な霊の力を受容するとされているのが、聖婚の儀式と言えらる。

ところでイナンナとドゥムジの関係についてだが、ドゥムジという名前は「忠実なる息子」という意味であり、女神イナンナにとって、ドゥムジは息子のような恋人であるといえる。これは愛の女神に共通していることであり、女神イシスとオシリス、女神キュベレとアッティスの関係も同様である。この2者関係、すなわち太母と少年神との関係についてNeumann（1971）は「太母に属する少年は春の神であり、彼は殺されて死なねばならないが、その死は母によって嘆かれ、彼は再び産み返される。…（略）彼らはその身体的な美しさによって女神の恋心を惹きつけるだけである。それを抜きにすれば、彼らは神話の英雄たちとは対照的に、力も特色もなく、個性と行動力に欠けている」と述べている。つまりここでいう少年神とは、大地に蒔かれる種のような存在であり、新しい命を生み出すための、個性の全くない、単なる授精力に過ぎないと言える。そして、蒔かれた種が芽吹き新しい命を生み出し、その後枯れて土に返り、また次の新しい命を生み出すもとなり…と永遠に循環していく生の営みがそこには見られる。豊穣をも司る女神からすれば、それは必要不可欠なあり様であるが、ここでの女神にとっては蒔かれた種が何であって問題ではない。ただ、授精力がありさえすればいいのである。それゆえ、女神自身はいつも自己完結しており、性的結合としては対等性を有しているとはいえないだろう。これはいわゆる「永遠の少年」のイメージにも繋がる。永遠の少年とは、ギリシャのエレウシスの密儀における少年神「イアッコス」を指して呼んだ言葉であるが、エレウシスの密儀とは平たく言えば死と再生の儀式であり、母なる大地において穀物が春には芽生え、冬には枯れていくことを意味しているのである。そして、「この死と再生を繰り返す穀物の姿の権限として『永遠の少年』イアッコスが登場するのである。永遠の少年は成人することなく死に、太母の子宮のなかで再生し、少年として再びこの世に現れる」（河合、1976）のである。イナンナにとってのドゥムジもこれに近いイメージだと言うことも出来るだろう。

また、イナンナについてはシュメール神話において、「イナンナの冥界下り」がある。この神話は要約すると以下ようになる。

天と地の女神であるシュメールの女神イナンナが、天地を捨てて地下界へ降りていく決心をする。地下界には、冥界の女王であるエレシュキガルがおり、自分の国に入ってきたイナンナに対して怒り狂い、イナンナは殺されてしまう。しかし、イナンナは事前に三日経っても自分が帰ってこなければ自分を救出してくれるよう父の神々に助けを求めると、信頼していた女性侍従ニンシュブルに伝えてある。イナンナが三日経っても帰ってこなかったため、ニンシュブルは、水と知恵の神エンキに二人の小さな嘆き人を作ってもらい、彼らがエレシュキガルと接触して、首尾よくイナンナを助け出す。しかし、イナンナが助け出され生き返ったからには身代わりを送らなければならない、スケープゴートとして、イナンナの配偶者であったドゥムジが差し出される。しかし、ドゥムジの姉ゲシュティアンナが彼を庇い、彼の身代わりに自らを犠牲として差し出し、結局、ドゥムジとゲシュティアンナは一年の半分ずつを其々の地下界で過ごすこととなる。

イナンナは天と地の世界においては、これ以上ないほどの大女神である。そのイナンナがなぜあえて冥界下りを行う必要があったのだろうか。最愛の夫であるドゥムジを差し出してまで。いや、むしろ最上の女神であったからこそ、最も地下深くまで降りなければならなかったのかもしれない。Perera(1981)は、

この神話に、キリスト教文化圏において「父の娘」と言われる現代女性が、女性性の根源に触れその全体性を回復していくプロセスを見て、現代女性のイニシエーションについて詳細に語っている。父の娘とは、現代社会において男性の価値観に沿って生きてきてしまい、男性の期待や評価に映し出されるなかで自分自身を見出してきたような女性を指しているが（豊田、1995）、イナンナはそのイニシエーションを最初に行った女性であり、「イナンナは私たちにその道を示しており、彼女は、女性の深い知恵と償いを求めて自分自身を犠牲にした最初の者」（Perera、1981）であると言われている。

そして、イナンナの冥界下りが「父の娘」のイニシエーションになぞられることから、イナンナのイメージには「父の娘」的要素が多分に含まれていることが示唆される。おそらくその一つは「セクシュアリティ」であり、魅惑的で奔放な愛に生きるイナンナと「父の娘」のイメージは重なる。「父の娘」について考えるとき、このセクシュアリティをどう捉えるのかは重要である。イナンナのイメージからはセクシュアリティこそ女性性の本質を表すものという印象も抱く。よって、父の娘と呼ばれる女性たちがそれを失わずにいたとも言えるし、逆に何かを得るための手段としてそれを用いてきたともいえ、二重の意味を持つ。セクシュアリティとは身体性にまさに結びつくものであるゆえ、慎重に考える必要がある。一方、摂食障害の女性たちは、自らの体を拒絶し女性であることを否定するかのようになりがちで、押し付けられたものではない真の身体性を生きるために、イナンナとは別の方法で現状に反旗を翻していると言えるのかもしれない。「父の娘」と呼ばれる女性たちも体を病む女性たちもともに、「身体」のあり方が変化し、捉えなおされる過程における必然的存在と筆者には思われる。現代において、「父の娘」と呼ばれる女性や摂食障害などの身体を病む女性が増加していることの必然的、あるいは積極的の意味をもう少し考えていく必要があるのではないだろうか。

3. 主体的受動性と意識性

ここではまず、聖娼のモチーフから連想された一つの視点「主体的受動性と意識性」について考察したい。

聖娼の儀式において、女性是不特定多数の見知らぬ男性（Stranger）を受け入れることにより、絶対的な受動性を体験する。一方、この儀式を見守る女神であるイナンナは、むしろ主体的に自らそれを受け入れる存在であり、聖娼として生涯を送る女性たちも同じく、その主体性を直観的に分る人々であるといえる。おそらく、主体性に目覚めるために、女性にとってはこのようなイニシエーションが必要なであろう。この主体的に受け入れるという姿勢が女性の自己実現にとって重要であることはよく指摘される場所であるが、玉谷（1985）も、分けのわからぬものを分らぬままただ受容することの重要性を指摘し、徹底的な受容の態度を取ることが逆に意識化への道を進ませることになると述べている。つまり、主体性は徹底的な受容性から生まれるというのである。受け入れることは母性的側面のひとつとすることもできるが、Schwing（1966）は分裂病の治療に必要なものとして「母なるもの」を挙げているが、彼女は母性を「母親愛」と「母なるもの」とに分けて考え、前者を、本能的で子どもを対象として愛するというよりは自己の一部として愛するとし、後者を、相手の身になって感じ他のひとの必要とするものを直観的に感じる能力であると述べている。つまり、自分のことのように相手のことを感じるのではなく、相手を相手として自分とは分離した存在として認識しつつ感情移入する共感能力が「母なるもの」であると言えるだろう。したがって「受け入れる」ということも、ただひたすらに受け入れつつも、それを意識し見ている「眼」が必要であり、呑み込み吸い込んでいくように受け入れるのではなく、「受けること」に伴う「痛み」を感じることも重要である。受け入れつつも、異物として他者を意識するのである。これが意識性であり、ここから、治療的に働き癒しへと繋がるような「主体的受動性」「母なるもの」へと繋がっていく。

また一方、聖娼の儀式に見られる絶対的受容性においては、誇らしくもありどこか悲しくもある女性の姿の必然性がある。そして、ここに女性性のもつ癒しの姿も垣間見られ、来るもの（Stranger）を身体で受け止め、力を被り、そして身体に刻み、痛む中で癒していく。アメノウズメのカオティックな裸踊りに

しても、自らをさらけ出す中で笑いをもたらし、アマテラスを引っぱりだすという救済に導いていくとも考えられる。売笑性という言葉があるが、周知のとおり春を売ることと笑いを売るとことは同義的に用いられる。そして「笑い」は癒しの種である。「女性の心性の『下方部分』を象徴している」（横山、1995）アメノウズメ、聖娼と同様に「『性』を『聖なるもの』として生き、神々とともに遊んだ女たち」（佐伯、1987）である遊女、彼女たちはともに女性性が荷う確かな癒しの力を身体ごと表していたように思われる。神聖視され本能・大地性と結びつけられていた女性の「体」で万事を内包するところにその存在様式が窺われると言える。

しかしまた同時に、別のことが頭をよぎる。つまり、聖娼は誰のものでもあるがゆえに誰のものではないという意味で聖なる処女とも呼ばれ、処女とは本来、「独立した女性」という意味を持つという。だがここでは、真に独立した女性であるとは言えないようにも思われ、自己愛的完結のもとに、自らの身体を空っぽにしてその器の中に投じられたものを無批判に受けるしかない、それに伴う痛みも覚えるのである。これについて水田（1992）は、次のように警鐘を鳴らしている。

「女性にとって、いまや自分自身の身体は、最も困難で重大なプログレマティックである。主体がそこに不在であるために、つまり、子を宿すが主体を宿す場とはみなされなかったがゆえに崇められてきた女性の身体、その身体をメタフォアとした物語を読むことを通してのみ認識への道をかろうじて開いてきた女性は、一方では新たな深層とされ、他方では深層を空にして（子宮を取り除いて）、女性の身体をみずからも消費し得る商品とされながら、その物語のテキストは不在のままなのである」（水田、1992）。

しかしながら水田（1992）の言葉からも窺われるように、女性の「産む性」は常に強調されることである。そのイメージとしては多産や豊穣性と結び付けられることが多い山姥（吉田、1989）を挙げる事が出来る。大庭みな子の「山姥」像においては、山姥とは愛するものを呑み込むまで追いかけ、しかし自分の羽を抜いては織物を作り上げる鶴のように、男との関係で言えば男を食い、男に食われる母性的存在だと言う（水田、1998）。ここでいう山姥のイメージは自己愛的でありかつ自虐的である。これは高石（1997）の言う、日本人独特のマゾヒスティックな対象支配、ナルシズムのあり方につながるが、水田（1998）はこのような在り方について「強いられる仮の美しい姿の奥底に、本性である山姥の自我をいつも隠し持ち、愛や介護の名のもとに男や子供を食べ尽くして生き延びてきた、したたかな女の姿と自己意識がある」と言う。そして同時にここから、個体を越えて命を紡ぎ生命の永劫性を荷う、おんなの姿の必然性が垣間見られるのである。

さらに、女性性の「主体的受動性」をトリックスターと比較してみたいが、トリックスターとは多くの神話で活躍する「いたずらもの」「道化師」であり、ギリシャ神話におけるヘルメスや日本神話におけるスサノオがこれに当たるといえる。トリックスターは誰かにいたずらをして傷つけた人々の復讐を受ける。軽いレベルで言えば、冗談を言って笑いを被るということになり、もう少しシビアに言えば、肉体的・精神的な苦痛を受け、永続的な心の痛みを来し、傷ついたものとして相手を癒し、悩めるものが悩みを取り去るというスタンスである。これは、癡癡の世界や被虐待児の世界とも繋がる。女性性が荷う主体的受動性とトリックスターの「引き受け方」から導かれるイメージとは、確かに各々別個のものである。前者は、先にも述べたように神聖なものとして崇められていた女性の体が深く関与しており、後者はスサノオやサスラヒメといったさすらいの神が人間の犯した罪や穢れを荷って去っていく姿に重なる。後者についてはその別の形として、人間の穢れや悪を体現する「乞食」や「ヤクザ」のイメージにも繋がり、辺縁を漂いつつ、全体を浄化していく存在であると言える。しかしながら、アメノウズメのカオティックな裸踊りに繋がる女性性の「主体的受動性」も、トリックスターの心性もともに、「個の埋没に徹して、全体を救済する」という点では一致していると言えるだろう。

女性のイニシエーションという視点で考えてみると、先述したように、ただ受けとめ続けるだけではなく同時に痛みを自覚し他者性に目覚める過程において、太母にとっての少年神のような無名性の存在ではない別のものが立ち現れる。女性が匿名性の出会いをするなかで、自身の自己完結的なあり方に目覚め、ただ受け尽くし、自己愛的でしかない自身に痛みを感じたとき初めて、意識性が芽生えるといえる。したがって聖娼の儀式を通してひとつには、われわれは主体的に意識しながら徹底的に受容していくというあり方を獲得するといえ、女性性の成熟にとって重要であるといえる。考えてみれば、イナンナは冥界下り

において、自身の身代わりとして息子のような恋人であり、また最愛の夫でもあるドゥムジを差し出す。これは、冥界下りを経験してより成熟した女性性を獲得した彼女にとって、ただつき慕われるだけの恋人はあまりにちっぽけで、いと高きところにいたイナンナをいと高きところに縛りつづけ、自己愛的であるがゆえに孤独でもあった彼女をそこにとどまらせていたのが他でもないドゥムジであったからとも言えるだろう。

やや論旨が拡散したが、これまで見てきたように、女性の意識性の問題や女性のイニシエーション、さらに、女性性が荷うトリックスター心性がもたらす救済という癒しは身体を媒介として起こると言え、身体と深く関わりながら自然のリズムとともに生きる存在である女性にとっては、特に身体性の問題は重要だと考えられるだろう。それゆえ、心身症や摂食障害といった体の病を呈する女性が増加しているという現状を重くみなければならぬし、この現象について考察していくことの必要性が感じられるように思う。

4. 自然のリズムと聖娼

ここでは、上述した二つ目の視点「動的で、創造的で、生命感あふれる」聖娼の側面、すなわち、自然のリズムをまさに体現している聖娼のイメージについて考察したいと思う。

まず、聖娼について考える際、性をどうとらえるかということは本質的課題であり、性について考えることは身体性について考察することに重なる。性は確かに新しい生をもたらすものであり、また一方では、宗教的な法悦にも通ずるような宇宙との一体感、脱個人を経験させ、究極的には死へと繋がるものでもある。まさに性というこの一点において、生と死という両極の様相が姿を見せる。しかし考えてみると、新しい生命がもたらされるところに古いものの死が訪れることは、自然の当然の成り行きであり、これが生命の循環、自然のリズムと言える。確かに、出産は元来死を伴うものであった。また、生き物によっては、性交の後、雌が雄を食べてしまうこともあり、原宗教的な祝祭においては、同様の営みが実際に行われていることが記されている。

「全民衆の歓呼と注視の前で行われる遊女と情夫の公開の性交は祭儀の頂点をなすものであり、放縦無制約の集団混交が開始される合図でもあった。(中略)彼と交わった遊女は、性交のあとで雄蜘蛛を食い尽くしてしまう雌蜘蛛のように、情容赦なく彼を殺させてしまう」(W.シューバルト 1975年)。

大変グロテスクな記述なのだが、一切の感情を抜きにして考えてみると、生と死の循環をまさに性交という一点において表している現象であり、自然のメカニズムを表しているとも考えることも出来るであろう。確かに、イナンナの冥界下りにおいてもイナンナが死から回帰した際に身代わりとしてドゥムジが差し出されるが、これについてもPerera(1981)は「エネルギー保存の法則である」と言っている。

一方、このようなグロテスクさはNeumann(1971)の言う「恐ろしい太母の支配領域」に見られるものであり、これはJung(1951)の言う「母元型」や「母娘元型」に対応する層と思われるが、この様相について次のように述べている。

「しばしば血なまぐさい、残酷な、わいせつでさえある狂操の中で、無垢な子どもが生贄にされる。ときどき本来のネキユティア、つまり冥府への旅や「得がたい宝物」の探索がテーマとなるが、これはときとして月経の血を月に捧げる儀礼的性的な狂操または供儀とかかわりをもっている。おもしろいことには、拷問やわいせつ行為が「大地の母」によってなされる。血を飲まされたり、血につけられたり、また磔刑も行われている」(Jung, 1951年)。

これは先に述べたイナンナの属性についてのPerera(1981)の見解「母性性と処女性、生命の喜びと殺人の欲望、肥沃さと獣性との境界領域の半ば」というイメージにも繋がるように感じられるが、よく言われるようないわゆる母性の持つ否定的な側面「呑み込み、がんじがらめにする」というようなものではなく、もっと根源的なものにまつわる一種の「魔」とも呼べるような、グロテスクさを表している。そして母性の持つネガティブな側面というより、確かにプエラ(少女性)が持つ奔放さや無鉄砲さにより近く感じら

れる。いずれにせよ、この領域に見られる「魔」は、意識的に操れるようなものではなく、はじめからもうそこに存在しているものと理解される。この領域はPerera(1981)のいう、「意識の魔術的で原初的なレベル」「心と体の結びついた状態、いわば言語以前の墓=子宮状態」である。心理療法の場においては、「抑鬱や境界例的もしくはスキツォイド的イメージ」を扱うことに繋がり、ここには心身症や摂食障害の人々も含まれるだろう。「治療におけるこのレベルの仕事は、最も深い情動を含んでおり、必然的に言語以前の『乳幼児期』段階に結びつくもの」で「本能と情動と感覚認知とが身体感覚にやっとなじみは始めているような、身体・精神レベルの仕事」であるという。そして河合(1998)も聖娼のイメージについて「性と霊性の一致を招来する」と述べており、こころと体を二分極的に分けるのではなく、その全体性の中であらゆるものを感得する姿がそこには見受けられる。ここから、言語以前の世界に触れたりこころと体の二分極を越えたところにあるものを考えたりする際には、性=セクシュアリティという身体性に関わるものについてより一層注目していくことが重要であることが示唆される。先に述べた心身症や摂食障害の患者の増加も、体をどう捉えていくのか、あるいは体の感じるこころ、自然のリズムをどう取り戻していくのかということにも関わってくるように思われる。

また、Susan(1969)は、ボルノグラフィに関する論考の中で『猥褻なるもの』は、人間の意識の一つの原初観念であり、病める社会が肉体に対して持つ嫌悪感などという底の浅いものではない」とし、性について「依然として人間意識の魔性的な力の一つで・(中略)・善悪を超え、愛を超え、正気を越えたものとして、試練のための、意識の限界を突き破るための方策としての性」という側面があることを記している。ここでもやはり、性のもたらす恍惚感とそのコントロールの出来なさは死との関係の深さを示唆するものである。佐伯(1987)も同じく性と死との親和性を指摘しているが、遊女が性を遊ぶということを「単なる遊びに過ぎず、それ以上のものではない」と判断するのは誤りであり、「遊び」の持つ本来の意味を「アメノウズメの動作が『楽(あそび)』であり、葬送儀礼が『遊』と呼ばれた通り、こうした聖なるもの、他界との交感が、『遊び』だったのである」と指摘している。すなわち、性を遊ぶということを明快に「魂をなぐさむ」と表現しており、このような非日常(ハレ)の世界において経験されることが、どこかしら癒しへと繋がっていたとすることができるだろう。

聖娼のイメージから性や死、魔について考察してきたが、人間の本能的な部分に関わる自然のあるがままの様相、リズム、というものを考えていくと、これらは自ずと行きつくトピックであった。しかし、ここで「リズム」ということに焦点を絞って考えてみると、それは生老病死という流れや日本人にとっての四季の移ろいゆくありさまなど、常に変化しつづけること、万事が流転していること、を表しているように思う。それは生きとし生けるものの、あるがままの、また当たり前、在り方である。「死と再生」、「創造と破壊」という言葉で表すことも出来るが、このような二相的な動きよりもむしろ月の満ち欠けといった断続的な変化に近いかもしれない。そしてそれは、何度も同じことが繰り返されていると同時に、毎回異なる循環だと言え、このような聖娼のイメージが、心身症や摂食障害の人々にとってはどのように映っているのか、また彼女たちの抱える「身体」の病いとどのような関係があるのかを明らかにすることが「身体性の問題」について考察するひとつの契機となるように思われる。

<おわりに>

ここまで、「聖娼」のイメージから連想されることについていくつか取り上げ考察してきた。冒頭でも述べたように、これらが「身体性」とどのように結びついていくのかについてより綿密な考察を行うことが今後の課題である。

現段階においては、聖娼が性を聖なるものとして生きた存在であることから示唆されるように、身体性の問題と性(セクシュアリティ)との関連をより明らかにしていくことがまず大切であると感じている。つまり、心身症や摂食障害といった身体の病いを抱える人々にとってセクシュアリティとはどのように捉えられているのかという視点である。

また、心身症や摂食障害といった病いが女性に多いということからも明らかなように、女性性に関わる

ことがらについてより考えていく必要性を感じる。元来、女性は体との結びつきが強いと思われるが、また一方、女性の体が古来より神聖視されてきたという背景もある。たとえば、本論において取り上げたアメノウズメの振る舞いはまさに、女性の体とその癒しのちからを表しており、女性性が荷う癒しの力と身体性の問題は分ち難く結びついているように思われる。

本論文は、「聖娼」のイメージを中心としてそこから広がるいくつかのキーワードについて考察しており、拡散的な印象があることは否めない。今後は、ここで述べてきたようなことがらについて日々の臨床経験に基づきながら慎重に考察を深めていくとともに、より多角的に「身体性」について捉え、この問題についての研究を深めていきたいと思う。

<参考文献>

- 馬場あき子 1971 『鬼の研究』三一書房。
- Harding, E.M. 1971 *Woman's Mysteries*. (樋口和彦・武田憲道訳. 1985『女性の神秘』創元社.)
- Jung, C.G. 1951 *EINFÜHRUNG IN DAS WESSEN DER MYTHOLOGIE—DAS GOTTLICHE KIND/DAS GOTTLICHE MADCHEN*. (杉浦忠夫訳. 1975『神話学入門』昌文全書.)
- 河合隼雄 1976 『母性社会日本の病理』中公業書。
- 河合隼雄 1985 『序』(玉谷直実著『女性の心の成熟』)創元社。
- 河合隼雄 1998 『刊行に寄せて』(Qualls—Corbett, N. 1988 *The Sacred Prostitute* (菅野信夫・高石恭子訳. 1998『聖娼』日本評論社.)
- 河合隼雄 2000 『紫マンダラー—源氏物語の構図—』小学館。
- Kerenyi, K., Jung, C.G. 1956 *THE TRICKSTER—A study in American Indian Mythology*. (菅河宗一・高橋英夫・河合隼雄訳. 『トリックスター』昌文全書.)
- 水田宗子 1992 「女性の自己語り」と物語」『批評空間』4 Pp64-79.
- 水田宗子 1998 「山姥の夢」『国文学 女のテクスチュアリティ—古典文学の』43(5)Pp90-100.
- 宮野素子 2000 「視線とエロス」『心理臨床学研究』18(2)Pp.180-190.
- Neumann, E. 1971 *URSPRUNGSGESCHICHTE DES BEWUSSTSEINS*. (林道義訳. 1984『意識の起源史』紀伊国屋書店.)
- 折口信夫 1929 『古代研究』角川書店。
- Perera, S. B. 1981 *Descent to the Goddess: A Way of Initiation for Woman*. (山中康裕監修 杉岡津岐子 小阪和子 谷口節子訳. 1998『神話にみる女性のイニシエーション』創元社.)
- Qualls—Corbett, N. 1988 *The Sacred Prostitute*. (菅野信夫・高石恭子訳. 1998『聖娼』日本評論社.)
- 佐伯順子 1987 『遊女の文化史 ハレの女たち』中公新書。
- Schwing, G. 1940 *Ein Weg Zur Seele des Geisteskranken* (小川信男・船渡川佐知子訳. 1966『精神病者の魂への道』みすず書房.)
- Susan, S. 1969 *STYLES OF RADICAL WILL* (川口喬一訳. 1974『ラディカルな意志のスタイル』昌文選書.)
- 高石浩一 1997 『母を支える娘たち ナルシズムとマゾヒズムの対象支配』日本評論社。
- 玉谷直実 1995 『女性の心の成熟』創元社。
- 豊田園子 1995 「女性的なスピリチュアリティと心理療法—ユング派の観点から—」『精神療法』vol.21(3)pp255-261.
- 横山博 1995 『神話の中の女たち 日本社会と女性性』人文書院。
- 吉田敦彦 1989 『妖怪と美女の神話学—山姥・天女・神女のアーケオロジー—』名著刊行会。

〈Research Notes〉

A Study Concerning “KARADA” and “IYASHI” : Using the image of “Sacred Prostitute”

HIROSAWA, Aiko

Recently, in the psychotherapy women having physical symptoms such as a somatization disorder and an eating disorder are increasing. Thinking about this background I found it impossible to consider mind and body separately. And I have hit upon an idea that there is “KARADA” between mind and body, beyond them, or including them.

In this paper I used the image of “sacred prostitute”, which is one of the materials concerning “KARADA” and discussed some topics associated with this image. The Sacred Prostitute is also called “shrine maiden” or “shrine prostitute”, who has a sex with a stranger visiting the shrine. That is a sacred sexual contact. Regarding the structure of this paper, in 1. Motif of the Sacred Prostitute I touched on the image of the Sacred Prostitute and two points related with it, and in 2. The Goddess of Inanna I discussed an attribute of Inanna that watches over the ritual of the Sacred Prostitute. In 3. active-passiveness and an consciousness, and in 4. a natural rhythm and the Sacred Prostitute, which are two points associated with the image of the Sacred Prostitute, I discussed the necessity and the difficulty for women becoming self-dependent, a closely relationship between “KARADA” and “IYASHI” carried by woman, and the alteration of the life and the death and the grotesque aspects of sex. There should become important key words to discuss “KARADA” more deeply.